

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ベルリ風景 1844年頃

テオドール・ルソーは、コローなどに続き、1830年代にバルビゾンを見出す。以後毎年のようにここに滞在して制作、1847年には主なバルビゾンの画家の中で最初にかの地に定住した。また純粋に自然主義的風景画を描いた最初の画家と目され、その様式と精神で、バルビゾン派を代表する存在となる。夕暮れや朝日、雲の動きなど、大気の動きに敏感な感覚は、印象派にも大きな影響を与えた。風景は森の情感まで描ける画家として近代風景画家の第一人者と目されている。

最初アカデミー派のアトリエに通いローマ賞を狙うが結局失敗、それでも1830年代前半にはサロンに連続出品を果たしている。1834年(22歳)のアルプス旅行をきっかけに新しい傾向の風景画を模索するが、その成果を1836年のサロンに提出して落選、これは美術界でちょっとした事件となった。

以後落選を繰り返し、1840年代にはサロンに作品を送らなかったにもかかわらず、アカデミー規範に挑戦する一つのシンボルとしてサロン評にもしばしば取り上げられて、「偉大なる落選王」と評されるようになる。一方で革新派の美術評論家や愛好家には支持を得ており、ランド地方、ピレネー山脈、そしてフォンテーヌブローの森などで制作を行った。

二月革命(1848年)による体制の変化でサロンに復帰する。画面の周囲を樹木等で暗く、反対に中央に明るい背景を置く彼の「ルプソワール技法」は、バルビゾン派の風景画にひとつのスタイルを提供するものであった。

ミレーとの交友は生涯続き、コローはじめ、ドービニーなどもしばしば彼のもとを訪れており、最後まで文字通りバルビゾンの画家たちの中で中心的な役割を果たす。

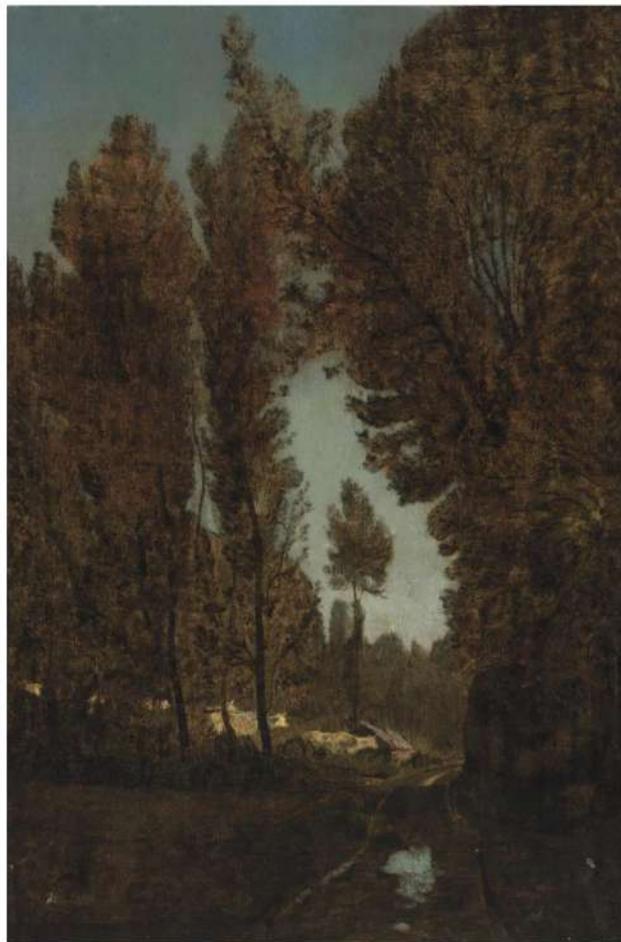
またルソーは代表作《フォンテーヌブローの森の出口、日没》(1848-1849年、ルーブル美術館)に見られるように、森のはずれの風景を好んで描いた。

バルビゾン派の画家たちの中でも現実的で飾り気のない画風で知られるルソーの絵には、人々の生きざまも動物たちの格闘も、ましてミレーの農民たちの生活というドラマは存在しない。何時間もじっと座り込んで森と対話し、綿密な観察によって、黙々と自然を構成する木々や、岩肌や地面を描く。

仲間たちから「森の鉄人」と呼ばれるゆえんである。しかし森のはずれには、暗く人を寄せ付けぬ奥深い森を想起させる木々や岩々の息吹と、一方で人里へと続く明るく開けた空間、そしてそれを見下ろすかのような空が広がる。自然そのものが展開する場であった。ルソーはその様な自然本来が持つ美しさを描こうとしたのである。

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU 世界の文化遺産

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 森を横切る牛たち

種類 格子パネルに油彩

サイズ 60×40.5 cm

サイン有り 鑑定書 「Michel RODRIGUE」

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西のはずれにあるバルビゾンの村では、カラーをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～この時代のルソーは落選王との異名をとった。

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

作品名 ベルリ風景 1844年頃

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー(1812~1867)



.Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ベルリ風景 1844年頃

種類 板に油彩

サイズ 23.5×35.5cm

*鑑定 Caude Aubry, Gaston Delestre

*左下にサイン有り

※ 栃木県立美術館「19世紀フランス絵画展」1973年出展作品

※ 来歴 Puvis de Chavanvns Jr. (Neuilly) 旧蔵

森の哲人・偉大なる落選王

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えてバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1836年 『ジュラ山脈の牛の山下り』落選この後13年間落選王の異名をとる。

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1847年 バルビゾン村に移住

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 バルビゾンの森

種類 板に油彩

サイズ 11.5×19cm

※左下にサイン 「Claude AUBRY」 証明書付き

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えればバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ホンテヌブローの森

種類 板に紙に油彩

サイズ 23×49cm

※左下にサイン

森の哲人

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えればバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

.Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 フォンテーヌブローの池

種類 エッチング

サイズ 30.0×42.0cm

森の哲人・偉大なる落選王

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えてバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1836年 『ジュラ山脈の牛の山下り』落選その後13年間落選王の異名をとる。

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1847年 バルビゾン村に移住

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

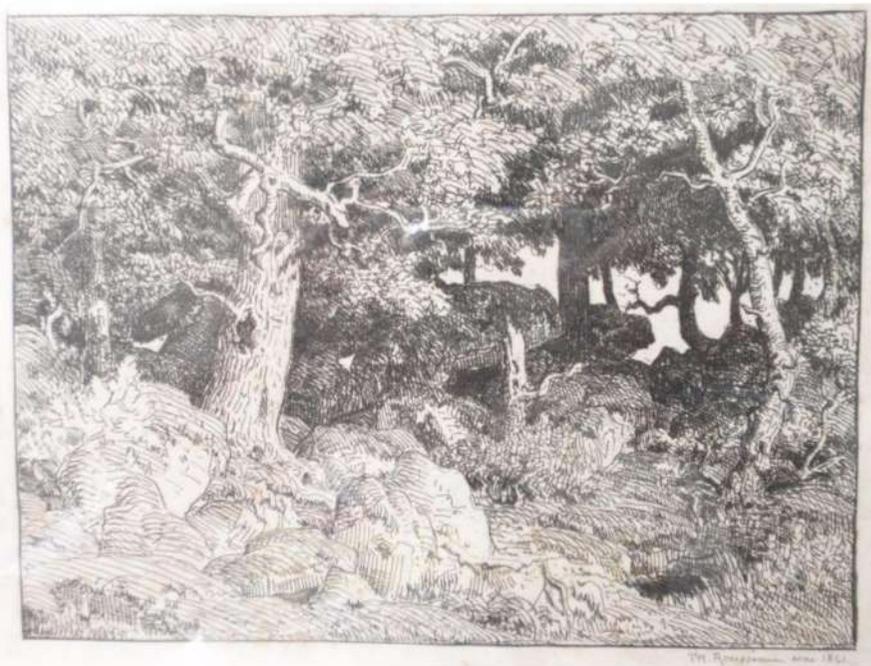
1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ブナの木と岩 1861年

種類 エッチング

サイズ 12.6×16.8cm

ルソーのオリジナル版画は僅か6枚だけである

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コロエをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

DELART R4 (カタログレゾネ)

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 バルビゾンの庭

種類 ガラスステロ版

サイズ 13×20cm(各)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コロローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン(官展)に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 **ビオの平原**

種類 **ガラスステロ版**

サイズ **22.5×28.5cm**

DE L'ART R6 (カタログレゾネ)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、カラーをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

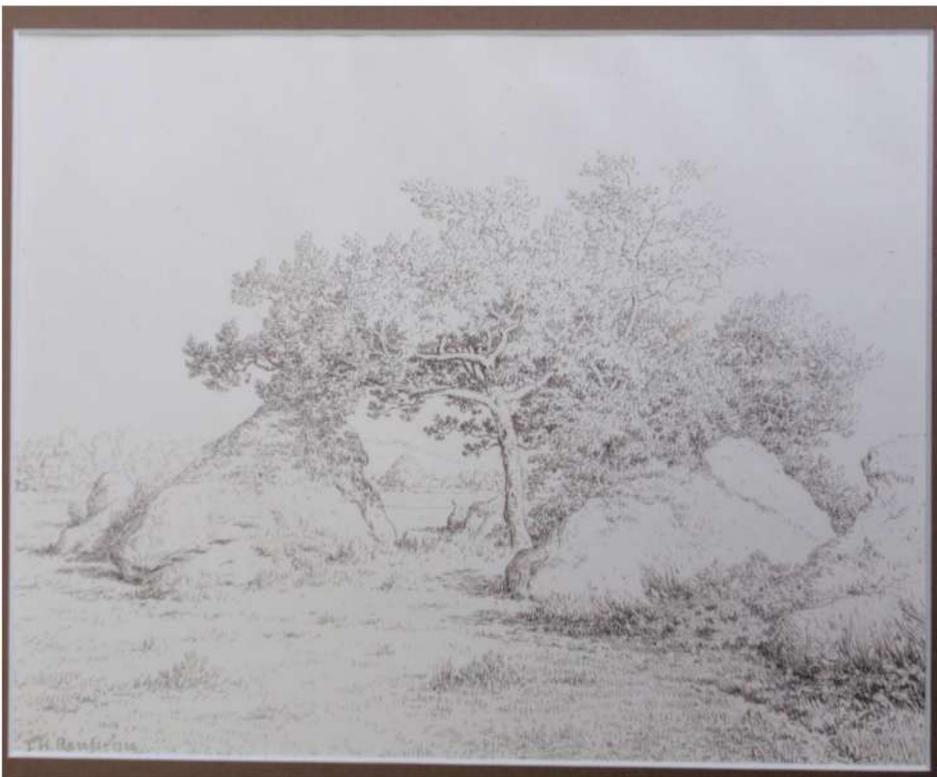
1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 サクランボの木 1862年

種類 ガラスステロ版

サイズ 21.7×27.5cm

ルソーのオリジナル版画は僅か6枚だけである

DE L'ART R5 (カタログレゾネ)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、カラーをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～